

▼特集

西川正雄氏と現代史研究

—二〇〇八年度ドイツ現代史学会シンポジウムの記録—

はじめに

大津留厚

二〇〇八年度のドイツ現代史学会は、八月一日、二日の二日間、神戸大学で開かれました。八月一日には、神戸大学に近い二つの第一次世界大戦時の捕虜収容所（板東、青野ヶ原）を訪れ、歴史の現場で捕虜の世界史を考えてみました。八月二日は神戸大学を会場として、「西川正雄氏と現代史研究」をテーマにシンポジウムを行いました。

二〇〇八年一月に他界された西川正雄氏の長年の歴史研究の意義をあらためて振り返り、西川正雄氏が日本の現代史研究に与えた「衝撃」をいろいろな立場から再検討し、今後にそれを生かしながら新たな問題に立ち向かう方向性を見出すことができれば、と考えての企画でした。西川正雄氏の研究の中心がドイツ現代史にあったこと、東日本と西日本のドイツ史研究者の交流のために、ドイツ現代史学会の立ち上げに参画されたことを考えると、やはりドイツ現代史学会が西川史学を再検討するにふさわしい場だろうと考えてのことでした。しかし同時にまた西川正雄氏がこだわった、実存的な世界史の中でドイツ現代史を捉えていこうとされたことを考慮して、報告者には広い視野に立った問題提起をして

いただくことをお願いしました。

木谷勤氏には「西川史学と現存社会主義」、田中ひかる氏には「国際社会主義運動史の視点から」、相馬保夫氏には「ドイツ労働運動史の視点から」、伊集院立氏には「世界史・世界史教育の視点から」と題して報告していただきました。いずれも西川正雄氏の著作を渉獵した上で批判的に考察した報告でした。ご本人の反論をお聞きしたいという余韻を残した学会の模様をじっくり味わっていたきたいと考え、『ゲシヒテ』誌上に再録することにいたしました。捕虜収容所の見学会も西川史学が目指した実存的な世界史の一環として行われました。その再現ができないのは残念ですが、批判的な考察を通じて西川史学の世界に接近する一助となれば幸いです。

（おおつる あつし・神戸大学教授）



第一報告 西川史学と「現存社会主義」

木谷 勤

1 西川さんと「社会主義」

『朝日新聞』（二〇〇八年三月七日）の「惜別」には、西川さんにとつて「ソ連崩壊の衝撃は大きく、何も書けなくなるほどだった」と書かれていた。私自身も氏との個人的対話の中で、氏の「社会主義」への思い入れの深さに気づかされたことが一度ならずあった。

西川さんは歴史学研究会委員長や学術会議の研究連絡委員として、また歴史研究・教育の国際交流の開拓・推進でも指導的役割を果たし、その中で教科書検定や靖国参拝などについて批判的また政治的立場を明確

に表明してこられた。

こうした国際的広がりをもつ学界およびその周辺でのめざましい活動のかたわら、西川さんは本業の西洋現代史や国際関係論の研究や編纂事業で大きな成果をあげ、多くの若手歴史家を育ててきた。

西川さんの幅広い研究分野の中核をなしたのは、一九世紀末以降ヨーロッパの国際社会主義運動の歴史であるが、そこで繰り広げられた革命、戦争、平和をめぐる国際労働運動の諸潮流の間に繰り広げられた交渉や対立、成功や挫折についての深い知識、苦渋や感動の追体験が西川さんの研究及び実践でのねばりづよい活動を支える知恵と情熱の源泉になったと思われる。そしてこの労働運動への深い共感がさらに氏をソ連をはじめ「現存社会主義」へのさまざまな批判とともに捨てきれぬ期待と思入れに導いたといえよう。

しかし今回西川さんの主なお仕事を通読してみて、氏が「現存社会主義」についての言及、とくに社会主義論としての包括的議論が非常に少ないことに驚いた。これはソ連崩壊から氏の受けた「衝撃」の大きさ、その背景があると察せられる思入れの深さに比して、私には意外であった。

以下この落差の原因・意味について私なりに考えてみることにしよう。

2 ヨーロッパ国際社会主義運動での「社会主義」の実態について

西川さんのヨーロッパ国際社会主義運動史研究の成果は次の諸著作（共著もふくむ）によって代表される。

- ① 『ファシズムとコミンテルン』（富永、鹿毛、下村と共著、東大出版会、一九七八年）

② 『初期社会主義運動と万国社会党』（未来社、一九八五年）

③ 『第一次世界大戦と社会主義者たち』（岩波書店、一九八九年）

④ 『もう一つの選択肢——社会民主主義の苦難の歴史』（石原、松村と共著、平凡社、一九九五年）

⑤ 『社会主義インターナショナルの群像 一九一四・一九二三』（岩波書店、二〇〇七年）

西川さんの長きにわたる研究で、コミンテルンないしその中核ソ連邦は常に焦点の一つであった。そして「冷戦期」に歴史研究での「東西」対立の緩和や相互理解の促進に努めた西川さんは、ソ連の現状に疑問を抱きつつも、表立って批判することはなかった。一九九一年のソ連解体以前の著書①②③での「ソ連型社会主義」への批判は、私の知る限り、西川さん自身の言葉ではなく、他の研究者の言葉の紹介やそれへの感想・同意の形でさりげなくなされていた。

「いわゆる〈ブラハの春〉の季節にコミンテルン史を公刊したチエコの歴史家M・ハイエクの（一九三五年）、コミンテルンが民主主義擁護にふみだしたその時、その内部の民主主義が失われた、という指摘は傾聴に値しよう。国家形態としてのブルジョア民主主義をファシズムから区別して擁護しようとしたことは疑いもなく民衆の利益にかなうことであった。……だとすれば制度としての民主主義以上に、人間の権利としての、また生活感覚としての民主主義が重視されねばならない。そのような意味での民主主義の契機を、ブルジョア民主制と社会主義体制を問わず、敏感にとらえていくことこそ、一層大きな課題であった。だが、その

ことが自明のかけで軽視されていたのでなかるうか」（傍線・木谷）
①Ⅳ 「ファシズムと民主主義」二九二頁。

3 ソ連崩壊と西川史学

一九八五年ゴルバチョフの登場以来、ソ連圏の政治体制は大きく変わり、それにともない現代史の批判的研究や資料の公開がすんだ。西川さんが「ペレストロイカ」についてどう考えていたかはつまびらかにしないが、ソ連「社会主義」の民主化、再生の機会として、その成功と成果を期待しておられたにちがいない。

一九九一年以降、改善された国際的研究環境のもとで、西川さんが渾身の力を注いだ最後の著作となったのが、⑤『社会主義インターナショナルの群像 一九一四・一九二三』（二〇〇七年）である。専ら第一次大戦期を扱った③や④と違い、本書は、コミンテルン（第三インター）
「第三」創立の一九一九年から、これと対抗する社会民主党左派の「ウイーン国際社会主義協同体」と同健派の旧「第二」グループが合同して新生「第二インターナショナル」が発足する一九二三年までを対象にしている。このほぼ五年は、革命ロシアが国際干渉と内戦を乗り越えてソ連邦として生き残る一方、中東欧ではロシア革命の直接・間接の影響や英仏連合国の圧力のもと、ドイツを中心に革命が一時高揚しつつも、最後に失敗した激動期であった。西川さんは「まえがき」で「本書では、一九一四・一九二三年の社会主義者の思想と行動を第三インターナショナルに対する擁護か非難かという枠組みから外して眺めてみることを通じて、しばしば切り捨てられきた局面や要素を拾い上げ、いささかなりともこれまでと異なるイメージを示そうとした」と述べたが、この言葉は私にこの時期のコミンテルンの活動、及びそれを通じてソ連社会

主義について従来聴けなかった氏の意見を知る期待を抱かせた。

しかし本書を読了したとき、私はその手堅い論述や史料の博搜に改めて感心しながら、ソ連社会主義やコミンテルンについてもっと突っ込んだ議論をきけるという期待では何か裏切られた思いがした。前にも紹介したように、西川さんはソ連社会主義の「非民主」や「自由の欠如」を語るとき、冷戦期のソ連非難への同調を避けるため、その言及を歴史的同時代人や研究者の冷静な発言に託して行った。この冷静さ——氏のソ連社会主義への思い入れの深さとの間にギャップを感じさせる——はこの新著でも変わりなかった。

「ローザ・ルクセンブルクは『ロシア革命論』（一九一八年）において、レーニンの方針を『革命から自由を奪うもの』として批判していた。……大きな目で見れば、その後のソ連邦政治・社会に
おいて『民主主義』が開花しなかったことが、この国の社会主義
体制自体にとつて躓きの石となったといえよう」（傍線・木谷）⑤
八七、八九頁。

4 「外交史」と「運動史」

私が西川さんの新著で注目したのは、氏が基本的に同意するローザのロシア革命「批判」やソ連の社会や政治に「民主主義」が育たなかったという判断が、第一次大戦後の国際社会主義運動史の氏の研究、具体的な分析・叙述の中でいかに生かされているかであった。そして、この期待が満たされなかったのは、単に歴史叙述の客観性を重視し、できるだけ史料や事実には語らせ、主観的評論を避けようという西川さんの方針に由来するだけではないと思う。

西川さんは本書の「あとがき」中の「方法論について」で「インターナショナルの歴史は、いろいろな分野の中では〈外交史〉に近いであろう」と語っている。西川さんの留学先での師、ハルガルテンが外交史研究に「社会的基盤」の方法をとりいれたのは周知のことで、西川さんもインターナショナルの歴史を「外交史」や「大会の歴史」に終わらせず、「運動史」やさらに各党の支持大衆の動きや国内情勢の変化まで追う「社会史」の必要にも言及している。だが一方、氏はこうした研究をインターそれぞれについて行うことは不可能であるとも率直に語っている。

しかし、「第二インター」のように各支部政党がナショナルなまとまりと自律性をもつ場合はそれと何とかが済むかもしれないが、その活動領域・支持基盤に多くの民族や政党が混在し、活動家の国籍さえ流動的なコミンテルン（第三インター）の場合——これは「第一インター」でも同じであるが——「外交史」的手法だけでは済まない。

このことを、私は西川さんの新著とほぼ同時に刊行された次の本を読んで痛感した。

篠塚敏生『ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党——中部ドイツでの一九二二年「三月行動」の研究——』（多賀出版、二〇〇八年）

5 「外交史」ではとらえきれない「国際社会主義運動」の実態

篠塚さんは「DDR崩壊」後、ハレ・ヴィッテンベルク大学を拠点にベルリンやハンブルク、ザクセン各地の図書館や図書館で利用可能になったKPDやコミンテルン関係の史料を利用し、八〇〇頁（うち三二〇頁が注）の大著を完成させた。この大著が扱う時期は一九二〇・

一九二三年だが、二二年三月ザクセンで起こった「三月行動」に叙述は集中する。篠塚さんはその背景としてコミンテルンとKPDの動きを詳細に明らかにするが、これによってわれわれが知った両者の関係はかなり複雑である。

世界革命を目指すロシアの指導者たちのドイツ革命への期待は極めて大きく、それはしばしばドイツの革命成功への過大あるいは早急な期待になってKPD指導者をなやまし、党を「攻勢理論」（急進路線）に向かわせたり、あるいはそれに抵抗するKPD幹部を交代させる裏面工作にコミンテルンを走らせた。コミンテルンとその支部であるKPDのあいだには密接な協力⇄指導関係が厳存したにもかかわらず、一方第二回世界大会で可決された「加入条件」をめぐり、あるいはそれから派生したドイツの「KAPD（左翼分離派）問題」や「イタリア（社会党分裂）問題」などで深刻な対立がわづらひつづいた。一見、最初から一枚岩に見えた両者の関係がこの時期なお複雑かつ流動的であったことは、ソ連社会主義の歴史についてわれわれの理解を深めてくれるように思われる。

一点集中的な篠塚さん研究に比べて西川さんの最後の仕事⑤はきわめて包括的な「国際社会主義運動史」で、第一次大戦中および戦後一九二三年まで三つのインターナショナルの関係を各組織の大会や組織間の交渉・対立を軸に時代順に辿りたいわば国際関係史である。それ故各インター内部の組織問題や地域ごとの運動はほとんど掘り下げられていない。しかしこうした「運動史」の視点は「第三インター」（コミンテルン）の場合とくに重要で、また革命後のソ連を中心に初期コミンツムの歴史とその諸問題を知るにも不可欠と思われる。

事実、微に入り細をうかがつ篠塚さんの叙述に照らすと、西川さんのヴァイマル初期のドイツ共産党について書かれたこともいくらか訂正が必要

らしい。例えば一九二〇年コミンテルン第二回世界大会で決まった「加入条件」は、「プロレタリア・民主主義」にとつて極めて重要な問題であるが——西川さんもしローザが生きていたら、これに反対したであろうといっている——、それ以上は論じていない。しかし篠塚さんによれば、大会でのこの議案の審議でKPDのレヴィやツェトキーンは反対ないし異議をとなえし、さらにこの問題から派生した「イタリア問題」をめぐり二年二月にKPD指導部とコミンテルン首脳との対立がさらに深まり、同月末KPD指導部は分裂、レヴィらは退陣したという（五一頁）。しかし、西川さんはレヴィやツェトキーンは排除は同年四月に起こつたとし、その理由も「イタリア問題」ではなく、同年三月に中部ドイツの労働者の武装蜂起「三月蜂起」をめぐり「第三」の方針をKPDが批判したためだという（一五三頁）。

要するに、コミンテルンの研究には、「外交史」だけでなく、運動史や組織論の視点からさまざまなレヴェルでの内部対立や路線の変化のこまかい分析が必要であろう。そしてこのような問題の追跡を通じてこそ、コミンテルンの功罪、とくに当面われわれの関心の的であるソ連社会主義での民主主義挫折の問題も解明されるのではなからうか。

6 ファシズム「政治理論」と「社会史」

次いで、西川さんのコミンテルン研究の焦点はファシズム問題にあつた。氏も指摘するように、戦後わが国のファシズム研究を支えた理論的枠組みは「ファシズム対人民戦線」であつた（同氏「ファシズムについて」『現代史研究』二二、一九六七年）。しかしコミンテルンがファシズムに対する闘いをはじめてから、一九三五年統一戦線路線の上に人民戦線の方針にたどりつくまで路線闘争と試行錯誤の長い時間が必要だつ

た。

一九六〇・七〇年代、気鋭の若手研究者、西川・富永・鹿毛・下村の四人が共同研究で取り組んだのがこの経過すなわち「コミンテルンによるファシズム分析の歴史、または裏から見た統一戦線論史」（まえがき）で、その成果が上述の著作リスト①の共著だつた。それによればコミンテルンは主敵ファシズム権力の階級的性格や社会基盤を論ずる一方、それ以上熱心に、闘いでライバル——労働運動での多数派でしばしばブルジョア政権にも参加した——社会民主党をどう扱うべきかを議論した。この議論から生まれたのが「社会ファシズム」論で、社会民主党をファシズムの支え、さらにファシズムそのものと見るこの議論は、コミンテルンの活動家にとっては受け入れられやすく、長く統一戦線の成立を妨げ続けた。

この共同研究をつうじて西川さんは自らのファシズム理論をつくりあげた。それはファシズム体制の成立を伝統的支配階級の「権威主義的反動」と中間層を主体とする大衆運動の「疑似革命」が抗争しつつ提携するという基本的構図で説明する。西川さんのファシズム論は政治学者山口定さんにも受け入れられ、戦後世代が生んだ政治理論の代表的一例として高く評価されている。

もちろん西川・山口理論で、ナチズムに関し、今日われわれが直面しているすべての問題を説明できるわけではない。その理論はファシズムの権力奪取・体制樹立の経過や力学を説明するには今日なお有効だが、体制確立後の大問題、たとえばホロコーストのような大虐殺に国民の多くが手を貸し、あるいは少なくとも黙視したという希有なことが文明化した近代社会になぜ起こつたかという難問を解決するには無力のように思える。これには、栗原優さんはじめ多くの研究者が取り組んでいるナ

チスのユダヤ問題「最終解決」での諸要素の連鎖の分析が必要なことはもちろんだが、背景としてD・ポイカートの「大衆階級社会の病理と歪み」や川越修さんの指摘する「社会国家での社会衛生学の人種衛生学への変質」といった「社会史」の視点での考察も有効であろう。

このようにファシズム研究は今後ますます多様な理論や視点を組み合わせ、深めてゆかねばならないが、われわれは西洋史研究者の中で科学的・批判的なファシズム研究の道を拓き、固めた先駆者として西川さんの名を心に留め続けるであろう。

7 「西側世界」の知識人とソ連邦

最後に、冒頭で触れた西川さんの「現存社会主義」（主にソ連）に対する思い入れの問題について、一言述べてこの報告を閉じたい。

かつて第二次大戦前、「西側世界」の人々、とくに左翼や進歩的知識人がソ連について持った認識は、恋人カップルの相互認識に似た面があった。すなわち孤立した閉鎖社会で実態の知られにくいソ連は、一見めざましい工業化や虚偽の「平等・民主」のスターリン憲法で自らを美化し、売りこむ一方、外の世界の人々は社会主義について自分たちの理念や夢をソ連の現実に投影し、いわばその幻影にはげまされてそれぞれ自国や国際的革命運動に献身していたのだった。

戦後、米ソが超大国になった「冷戦期」には、ソ連社会の閉鎖性はなおつづくが、「西側世界」との接触面や情報量が飛躍的に増え、それにつれ外の世界の人々もソ連の実態を冷めた目で見るようになった。「スターリン批判」やこれに続く中共との対立、ソ連の東欧諸国での民衆の反抗に対する力づくの抑圧はソ連に対する批判や失望を加速し、「西側」先進諸国での共産主義者やそれに同調する知識人の数は激減した。

それにもかかわらず、なお「西側」先進諸国でもなおしばらく「共産主義」への期待が生き続けたのも事実である。その期待を支えた根拠として、筆舌に尽くせぬ困難な条件のもとで建設され、ナチズムとの闘いで中心的な役割を果たした大きな犠牲を払ったソ連邦の歴史への共感と記憶、さらに「ペレストロイカ」で一時高まったソ連の政治・社会体制改革の期待——結局裏切られたが——などもあろう。しかし世界でソ連への支持を持続させるのに最も大きな役割を果たしたのは、ソ連ないしコミンテルンが植民地あるいは「第三世界」の解放にかけた熱意・努力の評価とそれへの期待があげられよう。

先に述べたように、私は残念ながら西川さんの体系的な「ソ連論」「ソ連観」を氏の主立った研究の中に見いだせなかったのだが、氏のソ連社会主義への共感の根幹は、その植民地への取り組みにあることは確かである。そのことは、西川さんの著書⑤の中で、ローザ・ルクセンブルクのレーニン批判紹介で「民主主義」の欠如がこの国の社会主義にとって「躓きの石」になったと言う記述のすぐあと、次のように述べられていることから間違いない。

「しかし、『加入条件』の第八条の『植民地と被圧迫民族』に関する文章には、ベルン会議の人々のような『家父長的』態度はほとんど見られない。さればこそ、コミンテルンは、非ヨーロッパ世界で圧倒的な支持を得たのであろう」（傍線・木谷）。

同様の例は現代イギリスを代表する歴史家ホブズボーム（一九一七—二〇〇四年）にも見出される。ウィーンとベルリンで育ち、後ケンブリ

ツジで歴史学を学んだこのユダヤ系歴史家は、一九三二年以来共産黨員であるが、その持続の原因を次のように説明している。

「ソ連はあらゆる政治体敵の中で最悪のものとは思えなかったし、むしろ新旧の西側帝国主義からの解放戦争に対する同盟国で、共産主義者の未来、脱植民地化しつつある世界の体制と運動の未来、その両方がソ連の存在にかかっていた」（傍線・木谷）（一九五頁）。

「私は、反ファシズムのための統一と人民戦線の時代に属しており……感情の上では世界革命の希望とその最初の誕生の地である一〇月革命とほとんど断ちがたい臍の緒で結ばれている」（二一七頁）。

（きたに つとむ・名古屋大学名誉教授）



第二報告 西川正雄氏と国際社会主義運動

田中ひかる

1 はじめに

二〇〇八年一月二八日に西川正雄氏（一九三三・二〇〇八年）が死去した。同氏による日本の初期社会主義研究に関する考察は別稿^①に譲ることにして、本報告では、西川氏の第二インターナショナルを中心とした国際社会主義運動に関する研究を概観する中で、同氏の業績を偲びたい。ただし、アナーキズムを研究対象としている筆者は、西川氏の研究

について専門的な観点から言及できない。そこで、非専門家の立場から、同氏の業績から読み取れることだけに基づいて、氏の研究について筆者なりの考察を試みる。そのため筆者が本稿で検討するのは、西川氏の国際社会主義運動研究そのものというよりはむしろ、その研究に一貫して見られる特徴と変化、およびそれらに結びついていた西川氏の研究者としての態度である（以下、西川氏の国際社会主義運動に関する主要著作である『第一次世界大戦と社会主義者たち』岩波書店、一九八九年、および『社会主義インターナショナルの群像』岩波書店、二〇〇七年、については、本稿ではそれぞれ『第一次世界大戦』、『群像』と省略して表記する）。

2 ストーリーテラー

『第一次世界大戦』についての書評において、「叙述」というスタイルをとり、分析を行っていない、という批判を受けた際、西川氏は次のように反論している。「実際には分析的論文より低く見られているのが現状」であるが、「歴史学の最終的に目指すスタイル」は「叙述」だと言われている^②。このような姿勢は『群像』に至るまで見られるが、すでに大学院時代に発表した「二〇世紀のカサンドラ」で叙述のスタイルはほぼ確立されていた^③。物語はよどみなく紡ぎ出され、簡潔な文章と興味深いエピソードを交えた人物の描写は、読む者を飽きさせない。研究者の道を歩み出した頃から優れた「ストーリーテラー」としての才能があったであろう。ただし、叙述を軸にしていたとはいえ、西川氏の文章がすべて一般読者向けのもだった、ということではない。その点を次に見ていきたい。

3 基本に忠実な研究と政治的見解の表明

西川氏による国際社会主義運動を扱った二冊に関しては、その本文の大半で、史料批判や先行研究批判などの作業が見られない。他方、先行研究に関する見解はほとんどが註で示されている。そのような註を見れば、西川氏がどのような作業を経て本文を書くに至ったかがほぼ理解できる、という見解を示す者もいる。⁴

先行研究で提示された学説であつても、あるいは、西川氏独自の推測であつても、いまだ研究者の間で確立していない解釈、もしくは、確実な裏付けがとれていない解釈である場合、西川氏は、そういった事情を一切説明しないまま、本文に疑問符を付けることで、そのことを暗示している場合もある。⁵ もちろん、そのような態度は、歴史研究者としては当たり前で、ただ研究の基本に忠実なだけであらう。とはいえ、同氏が発表してきた文献・資料・図書館・文書館についての調査報告が研究業績の中でも重要な部分を占めていることを見れば、⁶ あるいは、すでに述べたように、論文の註を見るだけでも、そのような研究態度が、基礎的な史料調査に裏付けられていることが読み取れる。その原点は、アメリカ留学時代に見た「押収文書」だったようである。⁷

以上のような、綿密な史料調査を背景にしている、ということとともに、西川氏の論文からは、歴史上の思想や運動を、現実の政治的な論争から引き離し、歴史研究として成立させることが重要である、という見解も読み取れる。⁸ だが他方では、「歴史叙述」とは異なる場所で、西川氏が極めて政治的な見解を表明していることがしばしば見られる。⁹

このように、一九六〇年代以降から二〇〇七年の『群像』に至るま

で、西川氏の研究は、徹底的な史料調査と、それに基づく抑制した叙述、そして政治的なメッセージの発信によって特徴づけられる。ただし、一九六〇年代から一九八〇年代にかけて、西川氏の見解には変化が見られる。

4 多様性を描き出す——一九六〇年代から一九八〇年代までの変化

例えば、一九六九年に発表された論文では、第二インターナショナルの統一性が強調されたような文章があったが、二〇年後の『第一次世界大戦』においては、むしろ内部の相違が強調されている。¹⁰ さらに同氏は、『群像』において、第二インターナショナルが理論的に一枚岩ではなかった、という点にこそ歴史研究が目を向けなければならぬ、と指摘している。¹¹ 以上のような認識の変化は、一九七〇年代以降に西川氏が、第二インターナショナル内部に見られた論争や対立を検討したからだと思われるが、他方では、リンツ会議など国際学会に出席した経験からも生み出されたと思われる。西川氏は、「リンツ会議が第二インターに二重映しに見えてきさえる」と述べている。こういった、社会主義の統一性ではなく「多様性」に注目しようとする姿勢は、「多様な見方」があることが歴史学である、という見解にも認められる。¹² さらに、アナキストに対する認識の変化も見られ、¹³ 西川氏が社会主義というイデオロギーや彼らの組織から排除された人々をも視野に入れようとしていた、ということが読み取れる。

5 おわりに

西川氏の叙述では、フォーマルな国際組織が検討の中心におかれているが、各国の代表が別の組織や運動においてどのように活動していたの

か、友人や家族との関係はどうだったのか、そして、組織の外部にいたアナーキストのような人々が、第二インターナショナルのようなフォーマルな組織をどのように批判していたのか、という問題が、叙述の中に入り込む余地は十分にある。B・アンダーソンが『三つの旗の下で』で描いた、フリーピン・ナシヨナリストとアナーキストとの「つながり」を念頭に置けば¹⁶、社会主義者からアナーキスト、ファシストから資本家に至るまで、相互に相容れない主張を展開する諸運動や、個人々の「つながり」を視野に収めていくことにより、国際社会主義運動に関する、従来とは異なる歴史を描くこともできるのではないだろうか。とはいえ、もはや西川氏との対話がない以上、同氏がいかなる課題を提起したのか、それとどのように取り組むのか、ということを考える作業は、あとにのこされた側に委ねられている。

注

- (1) 拙稿「西川正雄氏と初期社会主義研究」『初期社会主義研究』二二、二〇〇八年（掲載予定）を参照。
- (2) 西川正雄「批判と応答 拙書に関する山内昭人氏の文章（本誌前号）について」『現代史研究』一九九一年、第三七号、六一頁を参照。
- (3) 西川正雄「二〇世紀のカサンドラ——ローザ・ルクセンブルク小伝」『歴史教育』一九五九年、第七巻、第二号、第三号、六三・六八、九七・一〇一頁を参照。
- (4) マイク・ヘンドリック・シュプロット「西川正雄氏（一九三三—二〇〇八）についての私的回想」『初期社会主義研究』二二、二〇〇八年（掲載予定）を参照。
- (5) 西川正雄『第一次世界大戦』一五頁を参照。
- (6) 以下の西川氏による諸論文を参照。「アメリカにおける押収文書マイク・ロフィルム化計画」『歴史教育』第一一巻第二号、一九六三年、六三・六八頁。「ドイツ現代史料概観——いわゆる押収ドイツ文書を中心として——」『史学雑誌』（一）第七二編第四号、一九六三・四、四五・六六頁、（二）第七二編第六号、一九六三・六、七一・九一頁。「第二インターナショナルおよびドイツ社会主義・労働運動の歴史——文献目録」『現代史研究』二四、一九七〇年、六二・八四頁。「ローザ・ルクセンブルク——史料と文献」『思想』五五九、一九七二・一、二二〇—二二三頁。「ヨーロッパ労働運動史研究について——『参考文献』に関する覚え書（歴史科学入門講座・一二）」『歴史評論』二九三、一九七四・九、七二・九〇頁（「ヨーロッパ労働運動史研究について」『歴史科学への道』上、歴史科学協議会編、校倉書房、一九七六年、二二一—二四六頁）。「海外研究動向」第二インターナショナル史の旅とヨーロッパの文書館・図書館」『社会思想史研究』一九七七年（一）、二〇六・二〇七頁。「コミンテルン第七回世界大会——史料案内」『歴史学研究』一九七七・七、四四—四八頁。「Japanische, koreanische und chinesische Periodika der Anarchisten und Sozialisten, 1905-1937: Ein Bestandsverzeichnis des IISG, Amsterdam」, *Bochner Jahrbuch zur Ostasienforschung*, 1978, S. 485-493。「ローザ・ルクセンブルク——その著作と彼女に関する欧文献の目録（一九四五—二〇〇三）——」『専修人文論集』七四、二〇〇四年三月、一・五七頁。
- (7) 前掲の「押収文書」に関する諸論文および以下を参照。西川正雄「『現代史研究』五〇号発行に際して」前掲、七〇頁。
- (8) 「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」『史学雑誌』六九（二）、

一九六〇年、三頁を参照。

- (9) 西川正雄「ヨーロッパ労働運動史研究について」『歴史評論』前掲、九〇頁（『歴史科学への道』前掲、二四五頁）、「まともと展望」『群像』二四四・二四六頁を参照。

- (10) 西川正雄「第一次世界大戦前夜の社会主義者たち」『岩波講座 世界歴史 一三三 帝国主義時代Ⅱ』一九六九年、二七〇頁および『第一次世界大戦』三〇頁、「第一次世界大戦前夜の社会主義者たち」前掲、二八一頁および『第一次世界大戦』九七頁を参照。

- (11) 「まともと展望」『群像』二二四・二二〇頁を参照。

- (12) 「第二インターナショナルと植民地問題」前掲、二五頁および『群像』三三四頁、西川正雄「社会主義・民族・代表権」『思想』六〇六・一九七四・一二・二〇・四一頁および『群像』二七五・三〇〇頁、Masao Nishikawa, "Zivilisierung der Kolonien oder Kolonisierung durch Zivilisation?", in: *Imperialismus im 20. Jahrhundert. Gedenkschrift für George W. F. Hallgarten*, hsg. von Joachim Radkau / Immanuel Geiss (München, 1976), S. 87-112, 西川正雄「労働運動と植民地問題」『歴史評論』三三四・一九七八・二・八一頁を参照。

- (13) 「第二インターナショナルと帝国主義——第八回リンツ会議に出席して——」『思想』一九七三・三・四四一頁を参照。

- (14) 「第二回国際歴史学会議へ個別テーマ一四」『教科書——国民の叙述から市民の叙述へ——総括報告』『歴史学研究』八一五、二〇〇六・六、四頁、「グッバイ・大日本帝国——『教科書問題』に関する基本的な考え方』『歴史学研究』八三三、二、二〇〇七・一〇、三七・三八頁を参照。

- (15) 「第二インターナショナル」前掲、四八四頁および『群像』二七四頁を参照。

- (16) Benedict Anderson, *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*, London / New York, 2005, 拙稿【書評】ベネディクト・アンダーソン『三つの旗の下に アナーキズムと反植民地主義の想像』『歴史研究』四四二・二〇〇七年、九五・一一六頁を参照。

（たなか ひかる・大阪教育大学准教授）

第三報告 西川正雄先生と社会主義・労働運動史研究 相馬保夫

1 はじめに——ある思い出

今回の大会（ドイツ現代史学会第三一回大会、二〇〇八年八月二日神戸大学）を企画・主催した大津留厚さんからお話をいただいたとき、まず思い浮かべたことは、今から三〇年近く前、オーストリアのリンツで開かれた労働運動史家国際会議、通称リンツ会議のことだった。まだベルリンの壁が崩壊する以前、この会議は、東西両陣営の労働運動史家が中立国オーストリアに一堂に会して、社会主義や労働運動の諸問題について互いの考えをぶつけあい、相互の理解を深めたいへん貴重な機会であった。西川先生に誘われて、当時ウィーン大学に留学中の大津留さんとともに参加したのは、一九八一年の第七回大会のことである¹⁾。

このときのテーマは、第一テーマが「第二次世界大戦までの労働者文化と労働者文化組織」、第二テーマが「主に第二次世界大戦までの地域・地方の労働運動史——研究対象として」であり、その他にウィーンで特設展「オーストリアにおける労働者文化一九一八・一九三四年」

が開催されていた。参加者は、開催国オーストリアと東西ドイツからが多かったとはいえ、何よりも驚かされたのは、東西の境界を越えたその国際性であった。西側からは、イギリス、フランス、オランダ、イタリア、スペイン、アメリカ、日本など、東側からはソ連、東ドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキア、ルーマニアなど、実に多彩であった。

報告と討論では激論を交わす東西の歴史家たちが、会議の合間の休憩や食事の時間になると、和気あいあいに会話する光景も、当時の日本では考えにくいことであった。大会の常連になっていた西川先生が、大学院のゼミでの厳肅な雰囲気とは違って変わって、その中で実に生き生きと楽しそうに懇談している姿が印象的で、今でも目に浮かぶようである。各地の研究者が集まるこの国際会議は、先生にとつては、ご自身の研究テーマである社会主義インターナショナルと二重写しになっていたのではないだろうか。

私にとつては、労働者文化というテーマは、G・A・リッターの編著（一九七九年）などですでに親しんでいたが、大会でそれを論じる歴史家たちの幅の広さ、地域によって異なる問題意識に衝撃を受け、大津留さんと回った特設展とカール・マルクス・ホーフの実物に接して、研究意欲をかき立てられたことでも思い出深い。リンクドクイストの「君の足下を掘れ」という報告の、地域の労働者史を市民とともに発掘しようとする姿勢は、大津留さんに案内していただいた今学会一日目の青野原俘虜収容所跡の見学会に受け継がれているように感じた。²⁾

大会テーマからもうかがい知れるように、時代は、思想や組織を中心とした古典的な社会主義・労働運動史研究から労働者の社会史研究へと移り変わっていった。その中で、西川先生は、社会史的研究より

もむしろ一貫して国際的な社会主義運動史の研究を深めていく。

2 戦後歴史学の中で

西川先生の歴史学を語る場合、いわゆる戦後歴史学との関係は欠かすことができない。一九三三年生まれの先生は、丸山真男（一九一九年）、江口朴郎（一九一一年）、水田洋（一九一九年）といった戦後歴史学の先達から多くを学び、留学のため渡米してから、帝国主義研究で名を馳せたハルガルテン（一九〇一・七五年）の下で研鑽された。同教授は、ミュンヘン大学でマックス・ヴェーバーに学び、ナチの政権掌握とともに亡命したユダヤ系の学者である。先生はそこで初めてナチ関係の押取ドイツ文書に触れ、原史料の緻密な取扱い法に習熟したという。このような経歴から出発点としての反戦・平和・民主主義の信念が、学問的な方法に研ぎすまされたであろうことは、その後の先生の研究を見れば想像に難くない。また、資本主義世界と社会主義世界とに分裂し、学問にもイデオロギーの対立が投影されていたドイツにおいてではなく、外国から距離をおいてドイツやヨーロッパの歴史を批判的に考察する独自のやり方が固まったであろう。³⁾

西川先生と同時代のドイツの歴史家たちのことを思い浮かべてみると、世代としての共通性とともに、おかれていた歴史学界の状況が相対的に異なっていたことに気がつく。西ドイツでは社会（構造）史を唱導した歴史家たちがそうで、ヴェーラー（一九三一年）、ヴィンクラ（一九三八・年）、ユッカ（一九四一年）、それにハンス・モムゼン（一九三〇・年）らが広い意味での同世代に含まれる。それに、フリッツ・フィッシャー（一九〇八・九九年）とともにドイツの戦争責任論争で論陣を張ったガイス（一九三一・年）、近代反ユダヤ主義研究のリュ

ールプ（一九三四年）、労働運動史研究のG・A・リッター（一九二九年）、グレービング（一九三〇年）らも加わる。彼ら彼女たちの経歴はさまざまであるとはいえ、その先生の世代とはいえば、西ドイツにおける戦後歴史学第一世代のコンツェ（一九一〇・八六年）、テオドール・シーダー（一九〇八・八四年）、エアトマン（一九一〇・九〇年）らであり、彼らは革新的な歴史学を主張し、多くの弟子を育てながら、一九九九年のドイツ歴史学大会でナチとの関与を疑われた人たちである。

その大会における歴史家の責任問題に関連して行われたベルリン・フンボルト大学のプロジェクトでのインタヴューに答えて、ハンス・モムゼンは、「一九四五年から一九六〇年代中葉までの時代ほど、これだけ古い世代の人たちが優勢だったことは、いまだかつてなかった」と言い、コツカは、「社会史は一九六〇年代後半に呪文になった。それは、自らの専門分野においてあらゆる進歩的で、望ましい傾向を具現する言葉になった」と述べている。⁴⁾

主に一九三〇年代生まれの歴史家が研究を始めた五〇年代から六〇年代初め、分断国家西ドイツでは、日本とは異なり、古い世代による圧倒的に保守的・反共的な、あるいはせいぜいのところリベラルな歴史学が主流であった。その風潮に風穴をあけたのが、六〇年代のフィッシャー論争であり、七〇年代の社会（構造）史の問題提起と「ドイツの特殊な道」論争が、西ドイツに批判的な歴史学を定着させたといつてよい。それは、六〇年安保闘争のときのように、学界においても民主主義から社会主義まで幅広い戦線が成立していたように思われる日本とはかなり異なる状況であった。西ドイツでは、一九六八・六九年の運動とその世代の登場とともにようやく保守的な体制に対抗し、民

主的・批判的な歴史学を担う三〇年代生まれの歴史家たちが学界を主導していくことになる。戦後の出発点からマルクス主義やソ連社会主義の影響下に学問を形成し、講座派と労農派の論争の記憶も新しい西川先生の世代にとつては、東ドイツの公式史観に対抗して、マルクス主義よりはむしろ英語圏の近代化論に基づいて社会（構造）史を提唱した西ドイツの歴史家たちに違和感を感じたのも当然かもしれない。先生が「自前の歴史学」を強調されるとき、こうした日本の戦後歴史学の伝統からの発想が⁵⁾つねにあった。

3 社会主義・労働運動史研究

侵略戦争を引き起こした天皇制ファシズムの軛から解放され、戦後民主主義による再出発にあたって、多くの日本の知識人の念頭にあった問いは、いかにして真の近代化をなしとげることができるかという切実な課題であった。丸山真男、大塚久雄らの戦後民主主義派は、方法こそ異なれど、いずれもヨーロッパ「近代」をいわばモデルにして、古い日本を批判し、日本に真の近代を根づかせることに心血を注いだ。そうした時勢の中で、西川先生が選びとつた研究テーマは、ドイツ・ヨーロッパ現代史という直近の過去であり、レーニン優勢の時代によりよつて、ドイツ社会民主党の左派でありながら、レーニンとロシア革命のやり方を批判したローザ・ルクセンブルクであった。先生はその選択を偶然だったかのようにさりげなく振り返っているが、今から思えば、民主主義と社会主義、民族主義の関係という戦後日本の一大テーマを問い、思索する上で、これほど適切なテーマは他になかったのではないか。

六〇年代までドイツにおける労働運動史・社会主義運動史の研究

は、東ドイツにおける社会主義統一党公認のマルクス・レーニン主義史学と西ドイツにおける社会民主党系史学とはつきり二分され、学問研究といえども冷戦のイデオロギー対立に色濃く染め上げられていた。東ドイツの公式史観が、一八四八年革命期のマルクス・エンゲルスに始まり、ドイツ社会民主党、なかでもローザやカール・リープクネヒトらその左派を通じて、ドイツ共産党およびそれに連なる社会主義統一党への流れを一筋に描き出したとすれば、西ドイツでは、マテューアス（一九二一・八三年）やG・A・リッターらが、一九五九年ゴードスベルク綱領に至るドイツ社会民主党の民主的・改良主義的な伝統に光を当て、体制への「統合」と政権担当政党への歴史を説明していったのである。日本でドイツの社会主義・労働運動史研究をしようとするれば、否応なくこうした両極対立の研究史に突き当たることになり、自己の信念のありかを問われることになった。

一九六六年の西川先生の論文「ドイツ第二帝制における社会民主党——『修正主義論争』の背景」は、シヨースキーの党史研究（一九五五年）やドイツにおける研究の動向をふまえつつ、手に入る限り徹底的に史料を渉猟して、どの派にも偏ることなくこの論争を過不足なく論じた傑作であり、細部の厳密さを揺るがせないその完成度の高さは他の追隨を許さない。同時にそれは、日本における労働運動史研究が共産党など無産政党の個人史的研究か、または経済学畑の社会政策・労資（使）関係史的研究かに分かれていたことを考えると、独自の運動史研究の開拓であったようにも思える⁵。

六〇年代からの西川先生の学界での活躍はまことにめざましい。ローザ・ルクセンブルク、ドイツ社会民主党の研究に続き、その間に論文「ヒトラーの政権掌握」および国際ファシズム研究への問題提起を

はさんで、六九年に『岩波講座 世界歴史』のために書き下ろされたのが、「第二インターナショナル——形成期に関する試論」と「第一次世界大戦前夜の社会主義者たち」であった。ローザや社会民主党を扱った論文ですでに十分に片鱗を見せていた生き生きとした人物描写の筆がここではさえわたり、国際労働運動の舞台に登場するジョレスやローザ、ペーベル、レーニンなどの役者が精彩を放ち、躍動しているかのようである。それは、レーニンとロシア革命、そしてコミンテルンの研究に連なる日本における研究潮流と接点をもちつつ、それとは距離をおき、当時の歴史的状況の中に位置づけた第二インターナショナルの研究であった。そして、知識人として現実の政治事象に深く関心をもちながらも、目標としての社会主義から区別された社会主義運動の歴史が研究対象とされていた。

そのことをいつそう実感できるのが、富永幸生、鹿毛達雄、下村由一という同世代のドイツ現代史研究の友人たちと共著で出した『ファシズムとコミンテルン』（一九七八年）である。「ファシズムと民主主義」を論じた同書の末尾に、一九三五年のコミンテルン第七回世界大会に関連して、チェコスロヴァキアの歴史家ハイエクの指摘を参照しながら、こんな一節が見られる。

「……国家形態としてのブルジョワ民主主義をファシズムから区別して擁護しようとしたことは疑いもなく民衆の利益にかなうことであった。だがそれは問題の出発点に他ならない。もとより、ブルジョワ民主主義はそれ自体としては目標ではないと考えられていた。それは、マルクス主義の立場からは当然と言える（社会民主党左派も同様に考えていたことが想起される）し、ヴァイマ

ル共和国の崩壊と共に、『民主主義』の魅力が失われ、不信が強まりさえていたことも考慮に入れるべきであろう。だとすれば、制度としての民主主義以上に、人間の権利としての、また生活感覚としての民主主義が重視されねばならない。そのような意味での民主主義の契機を、ブルジョワ民主制と社会主義体制とを問わず、敏感に捉えていくことこそ、いつそう大きな課題であった。だが、そのことが自明の陰で軽視されていたのではなからうか」（一九二二―一九三三頁）。

コミンテルンのファシズム論といえば、統一戦線と人民戦線をめぐる論議あるいはファシズムの比較研究が盛んであった当時、スターリンの国家政策の影響を論じるか、または第七回大会におけるディミトロフのファシズム論とそれに批判的な理論かが引き合いに出されるのが常であった。しかし、ここでの結論は意外でもあり、研究対象としての社会主義を論じつつ、著者の政治的実感が表明されているように思われてならない。あるいは目標としての社会主義にゆらぎが生じていたのだろうか。もつとも、ご自身は同書を、「コミンテルンの革命運動史でも反ファシズム闘争史でもなく、ファシズムに関する学説史でもない領域……コミンテルンのファシズム論を、その頂点においてつなげるのではなく、また、その鞍部において乗り越えようとするのではなく、『誤り』をも含めて、その時々の歴史的状況の中で『理解』する」（「はしがき」三頁）と歴史的な方法の適用として表現されているだけなのだ。

4 「自国史と世界史」

西川先生の研究に一貫して通底しているのは、インターナショナルの研究やコミンテルン研究に典型的に現れているように、一国的視角ではなく世界的視角からの問題へのアプローチであり、大状況における大國間の国際関係史に対抗し、もう一つの選択肢をつきつける社会主義者のインターナショナルな歴史であった。江口朴郎、ハルガルテンらから学んだ帝国主義・民族主義・植民地主義批判の視座を受け継ぎ、ジョルジュ・オープトの先駆的研究に刺激されながら行われた第二インター研究は、七〇年代の論文「第二インターナショナルと植民地問題」、「社会主義・民族・代表権——第二インターナショナルの経験」を経て、『第一次世界大戦と社会主義者たち』（一九八九年）という著作に結実する。その間に、ソ連・東欧の社会主義体制の崩壊という大変動を迎えながら、生き生きとした人物描写の妙はますますさえわたっている。

後にドイツ語にも翻訳された同書およびその後の展開を追った集大成の著作『社会主義インターナショナルの群像一九一四―一九二三』（二〇〇七年）は、渡欧した際にヨーロッパ各地の文書館・図書館・研究所を駆けめぐって集めた史料をもとに書かれた。それらを読むと、第一次世界大戦から戦後にかけての戦争と講和に関する外交政策を各「運動勢力」との関係で見事に浮き彫りにしたアーノ・メイアの研究（一九五九、六七年）を想起させるダイナミックな記述が展開され、各国・各地域の社会主義・労働運動の歴史をあたかも万華鏡のように映し出す場としてインターナショナルが設定されている。それぞれの指導者の異なる背景が十分に描き出されていないという批判もありえようが、それまで知られていなかった小国の社会主義者のインターナ

シヨナル再建への奮闘ぶりをはじめとして、各国・各地域の運動を指導者の発言を通じて丹念に描写し、浮き彫りにしようというのが、先生の方法であった。そしてそれは、それら各国・各地域の運動についての膨大な研究を使いこなしつつ、あくまで原史料に基づいて記述しようとする、学問への真摯な姿勢に裏づけられていた。

インターナショナルの歴史を個々の地域についての研究成果をふまえて「運動の国際関係史」という視点から描き出すこと、ここに西川史学の真骨頂があった。そしてその背景には、日本の外国史研究に支配的であった「輸入史学」、あるいはミクロな「社会史」研究への批判的視座があった。先生は若い頃から、「ただ横のものをタテにする」「輸入史学」ではなく、「やはり自分のアタマで考え、自分のコトバで語れるようになりたい」という自前の歴史学を追求されてきた。原史料への徹底的なこだわりと研究史・研究動向への緻密な目配りは、長い時間をかけて熟成された『ドイツ史研究入門』（一九八四年）の構想と編集に存分に発揮されている。学部時代に初めて先生の授業に接したとき、学部生向けであるにもかかわらず、膨大な枚数にわたる手書きの「ドイツ近現代史関係邦語単行本目録」とタイプで打たれた洋書の参考図書文献目録 (SELECT REFERENCE BOOKS, MODERN AND CONTEMPORARY HISTORY, GERMANY AND OTHER AREAS) を手渡され、先生の誰にもゆるがせにしない研究姿勢に心を打たれたときの驚きは今も印象深い。

インターナショナルと日本の社会主義運動をつなぐ「点と線」を、史料をつきあわせてつなごうとした『初期社会主義運動と万国社会党——点と線に関する覚書』（一九八五年）は、小著とはいえ、先生が力を入れた歴史教育の分野における「自国史と世界史」の問題提起をこ

自身の研究で実践された優れた実例でもある。その冒頭の言葉は、思わず身をただしたくなるほどの迫力に満ちている。

「日露戦争の最中、第二インターナショナル・アムステルダム大会の席上、片山潜とプレハーノフが友好の握手をしたことは良く知られている。日本の初期社会主義者の、海外の諸運動に対する認識、それとの直接間接の交流については、とくに片山潜・幸徳秋水の場合、多くの研究が積み重ねられてきた。……こうした、運動の国際関係史の研究には、彼我双方の実情を同時に考慮することが不可欠であり、交流の点と線に限っても日本側の史料と相手側の史料をつき合わせる必要がある。だがそれに関して、ひとつには海外史料の入手が現在以上に困難だったせいであろう、これまで必ずしも十分な作業がなされてきたとは言いがたい。しかも従来の研究では根拠が明示されていないことが多く、それかあらぬか、定説が吟味されずに踏襲されたり、推定が事実化けたり、更には、孫引きが直接引用の如くまかり通ったりする例が見られる。従って、なお述べるべきことが多分に残っており、また訂正を要する事柄もあるように思われる。その一端を示してみたい」（五・六頁）。

5 おわりに——民主主義と社会主義・社会民主主義

一九八〇年代末からのソ連・東欧の社会主義体制の崩壊は、社会主義を研究対象としてだけでなく、目標としても考えてきた世代にとつて、大きな衝撃であった。新自由主義と市場経済万能の風潮の中で、社会主義・労働運動史の研究も様変わりした。「労働史の終焉？」が語

られる一方、欧米のフェミニズム論やポストモダン思想、カルチュラル・スタディーズなどに刺激を受けた多様な研究方向が現れるようになった。⁶⁾ 西川先生は、松村高夫、石原俊時の両氏との共著で『もう一つの選択肢——社会民主主義の苦渋の歴史』（一九九五年）を発表される。それは、社会民主主義の歴史のもつ現代的意義を改めて確認するものであった。

西川先生とほぼ同世代のドイツの歴史家グレーピングは、一九六六年に初版が出された『ドイツ労働運動史』の改訂最新版（二〇〇七年）の序論で、「何のためにドイツにおける労働運動の歴史をいけば異質な、没落した世界の歴史として書くというのか？」と自ら問い、「人間にふさわしい、社会的に公正な、政治的に自由な世界の形成は依然として完結しておらず、おそらくこれまで以上に脅かされているからである」と答えている。⁷⁾

西川先生は、『社会主義インターナショナルの群像』『まとめと展望』の最後の部分で社会主義・社会民主主義についてこう書かれている。

「自由とは強者の原理である。……社会の中の弱者、国際世界の中の小国、それは平等を求め、その立場から下からの『自助』を要求する。自由と平等はどちらにせよ極端に徹すると社会も世界もうまくいかないように思われる。そうであれば、どの辺で両者を調和させるかについて知恵を働かせるしかない。そのとき、弱者のまなざしを堅持して、平等・環境保全・国際平和をめざし、競争・開発・ナシヨナリズムを指向する勢力とは違う選択肢を示すのが、社会民主主義あるいは民主的社會主義なのである。その場合、社会主義とはいっそう民主的かつ合理的な仕組みとし

て『選ぶ』ものではなからうか。……今や社会主義は、ポパーが批判したユートピア思想を再び視野に入れることによっていっそう豊かな選択肢を発見すべきではなからうか。その場合、現段階では、『自由・平等・博愛』の替わりに『平和・人権・自由』をスローガンにするのがよいのではないか。核廃絶・軍縮が焦眉の急であることは言うまでもない。平等の追求は、形式的な『平等』ではなく人権に基礎を置くべきである。そして自由とは、あらゆる国家権力からの市民の自由を意味する。この三つを指すとき、社会主義思想と運動の歴史の中から学べることは多い筈だ。そのための思想や運動を『社会民主主義』と呼ぶかどうかは、じつはいつでもよいことだ」（二四五・二四六頁）。

ドイツ社会民主党でも活動したというグレーピングのスタンスは西ドイツ時代と少しも変わっていないように見受けられる。西川先生の場合、はたしてそれはどうなのだろうか。ご自身は、『現代史の読みかた』の「あとがき」で、三〇年以上前に書かれた文章（『歴史と現代』初出一九六五年）を再録したことに触れて、「読み返してみると、今なお本質的にそこから一步も出ていないことに嫌でも気付かされる」、「正直に言って、世の中の方が、私の左から右へと動いていった三〇年間のよう

に感じられる」と述べられている（三二四頁）。目標としての社会主義と研究対象としての社会主義とを峻別し、歴史研究者として生きた先生にとつて、自由と平等、あるいは平和と人権、自由の追求という点は、若き日にローザ・ルクセンブルクを研究対象に選んだときから終始一貫していたのかもしれない。そしてそれは、戦後を時代とともに生きた批判的・民主的な知識人のまさに一つの生きざまであった。われわれが

見習う点はまだまだ多い。

注

- (1) 大会の様子については、大津留厚「第一七回リンツ会議「労働運動史研究者国際会議」に参加して」『歴史学研究』五〇七（一九八二年）、五七・五九頁、六一頁。
- (2) 大津留厚『青野原俘虜収容所の世界——第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』（山川出版社、二〇〇七年）を参照。青野原俘虜収容所の展示会は、今年（二〇〇八年）の九月から一〇月にかけてウィーンのアオストリア国家図書館でも開催された（http://www.oesta.gv.at/site/cob_31391/5164/default.aspx）。
- (3) 「インタヴュー 西川正雄氏に聞く」『クリオ』二（一九八七年）、六六・八〇頁、西川正雄『現代史の読みかた』（平凡社、一九九七年）を参照。
- (4) 「Fragen, die nicht gestellt wurden! oder gab es ein Schweigegelübde der zweiten Generation?」 eingeführt von Konrad Jarausch / Rüdiger Hohls, in: <http://hszkult.geschichte.hu-berlin.de/BETTRAG/interview/interview.htm>. P. シェットラー編『ナチズムと歴史家たち』木谷勤・小野清美・芝健介訳（名古屋大学出版会、二〇〇一年）を参照。
- (5) Yasuo Soma, "Neuere Forschungen zur Geschichte der japanischen Arbeiter- und sozialistischen Bewegung, in: Christine Schindler (Hrsg.), *Die Internationale der "Labour Historians". Stand und Perspektiven der ArbeiterInnen geschichtsschreibung im 30. Jahr der ITH* (Wien, 1995), S. 45-60 を参照。
- (6) 相馬保夫「ドイツ労働史・労働運動史研究」『大原社会問題研究所雑誌』五二二（二〇〇一年）一・一二頁を参照。

(7) Helga Grebing, *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Von der Revolution*

1848 bis ins 21. Jahrhundert (Berlin, 2007), S. 11f.

(佐々木 やすお・東京外国語大学教授)



第四報告 西川正雄氏の世界観・世界史教育

伊集院立

私に与えられた課題は西川正雄氏の長年の歴史研究の意義を世界史・世界史教育から話すようにとのことである。このような貴重な機会を頂いたおりに、西川氏の世界史へのアプローチを辿ってみたい。

1 「自国史と世界史」

西川さんが最初に世界史について「主体的な」発言をされたのはおそらく一九八三年ではなかったか。これには「いやそれより一〇年前の一九七三年ではないか」との反論が出されるかもしれない。たしかに、多くの方がご存知のように、西川さんは一九七三年九月の『歴史学研究』四〇〇号の『月報』（一六五号）に『日・東・西』なる区分を排す」という一文を発表されている。そこでは「日・東・西」のような区分では、エジプト・トルコ・イスラエル、あるいはソ連邦・オーストラリアなどといった世界史を覆い尽くすことはできない、という批判を述べられていた。そして、この「日・東・西」という三区分別がいまお牢固として存在しているのはなぜか、その理由の一つに大学の歴史学科の編成にあることを挙げておられた。しかし、西川さん自身、日東西の区分を配すれば自然と世界史が生まれるとは思っておられなかったこと

は明らかだ。それは、「批判は分かった。では『日・東・西』に代わるものはなにか」と逆襲されると、西川さんが「もつともである」というほかはなかったと言われたことにも示されている。事実、柴田三千雄氏が翌年一月の『歴研』四〇四号の『月報』（一六九号）で「西川氏によれば、さし当り、これにかわる代案がないようである」と言われたが、その通りであったと思われる。しかも、柴田さんは「西川氏の提言が、かつての歴研の社会構成史的な部会区分論に全く言及せず、あたかもそれが存在しなかったごとくに問題提起されているのはどうしたことであるのか」と問うておられる。歴研は一九四九年、東洋史・日本史・西洋史の三部会制を廃止し、原始古代、封建、現代という社会構成史的な部会編成を採って、「世界史の基本法則」をその年の大会テーマに掲げていた。柴田さんご自身、当時の歴研委員で三部会制を排し、社会構成史的な部会編成に尽力されたはずである（『歴史学研究会 四十年の歩み』歴研編一九七二年、三八頁以下）。柴田さんは『日本史』が『東洋史』『西洋史』と同じレベルに置かれることに大きな問題がある。この根底には、近代日本の脱亜論的意識があり、後に『皇国史観』が生まれた……世界史の理論構成としては、『日本史』は自足的な単位としては成立しえない」といわれる。ここで、柴田さんが日東西の区分「の根底には、近代日本の脱亜論的意識がある」と述べられたのは、卓見であったと思われる。あるいは、柴田さんは西嶋定生氏の「東アジア世界論」における日本のありかたを念頭におかれていたのかもしれない。しかし、だからといって、柴田さんは研究組織上の単位として「日本史」を否定されたわけではなかった。「重要なことは、既存の世界史論への理論的な再検討の作業であろう。……たしかに、社会構成史の理論は、『日・東・西』の三分の伝統的発想との対決を避けていた。この点の再検

討、更には、社会構成史理論の根底にある発展段階論、あるいは歴史における文化的要因の意味と役割といった問題の理論的な検討が、結局は具体的な区分論よりも重要な課題であるのである」と言われている。

西川さんはおそらく柴田さんの批判を「仰るとおり」と受けとめながらも、「日・東・西」の区分を排すという課題は「代案のない限り残しておいてよいような無害な代物ではあるまい」として、西川さんご自分のやり方で模索を続けられたのではないか。それが少し姿形を整えてきたのが、冒頭にのべたように、一九八三年の『朝日新聞』（一九八三年四月二八日夕刊）に掲載された第一回「日米歴史学会議」（同年三月、東京と京都で行なわれた）についての文章（『国史』の枠から脱却図る試み）ではなかったか。この第一回「日米歴史学会議」はアメリカ歴史学協会からの呼びかけで実現したものだ。同協会は当時一万五千人の会員を擁するアメリカの歴史学界を代表する学会である。その学会が、日本とのこれまでの交流を一層深めたいと提案して来たのであった。一層の交流とは、西川さんの言によれば、それまでそれぞれは「国史」の枠での交流をさかんに行ってきたが、その「国史」の枠を越えた分野で日米相互の交流を定着させたいという意味であったという。「国史」の枠を越えるというアメリカ側の提案は、日米双方にとって「異国」のヨーロッパに焦点を絞った「日本およびアメリカ合衆国におけるヨーロッパ史研究の現状と問題点」というものであった。

この会議では、アメリカ歴史学協会会長のフィリップ・カーティン氏（ジョンズ・ホプキンス大学、アフリカ史専攻）、元会長デイヴィッド・ピンクニー氏（ワシントン大学、フランス史専攻）ほか四名（オットー・プフランツィ氏（インディアナ大）やジョン・クアタート氏（ヒューストン大）ら）の研究者がそれぞれ報告し、日本からは石坂昭

雄氏（北大）、服部春彦氏（京大）、木谷勤氏（大阪教育大）、三宅立氏（明大）、栗原優氏（神戸大）が力のこもった報告をされた。この会議には、特に「歴史教育におけるヨーロッパ史」の部会が設けられ、日本からは吉田悟郎氏（前広尾高校教諭）、高山博之氏（東京学芸大附属中学）が、またアメリカ側からはウィリアム・マクニール氏（当時シカゴ大）が報告された。マクニール氏は、アメリカでは歴史教育がヨーロッパ中心主義から世界史への視野を広げようとしていると主張されていた（会議についてのアメリカ側の記録は、“U.S. Historians Participate in Japanese Research Conference”, in: *AHA Perspectives Newsletter of the American Historical Association including EIB notices*, Vol. 21, No. 5, May-June 1983, pp. 6f.)。

西川さんは先の『朝日新聞』の記事で「総じて言えば、カーティン氏が開会の辞で力説した通り、この企画の意義は『日米』の歴史家の会議でありながら、どちらにとっても『外国』であるヨーロッパ史を対象とし、『国史』の枠を破って『世界史』の観点に立とうとしたことにある」と述べられている。そして、歴史教科書に関する当時の文部省の検定意見こそ、「世界史」的視点に対抗して自国の枠にとられる自国中心主義の権化そのものである、と喝破された。自国中心主義を脱却しなければならぬということ、この日米歴史学会議でのマクニール氏の報告や、イギリス産業革命をモデルとすることに異を唱えたキャメロン氏、またオーバークラウジッツの地域史を論じたクアタート氏との交流で、西川さんの確信となったようであった。

そのあと、世界史教育にかかわる高校や大学の教師を中心に、「比較歴史教育研究会」という小さな研究会が結成された。その会長には、日米歴史家会議以来このグループにかかわってこられた成瀬治氏に

なつて頂くことになった。しかし、自国中心主義からの脱却は西川さんにとつても「言うは易し」であった。西川さんが『世界』（一九八五年二月号）に書かれた一文によれば、労働史家国際会議（通称リンツ会議）など数多くの国際会議に参加して、歴史研究は「個人」の問題であることは勿論ではあるが、私は個人であり「日本人」とは関係ありませんといったコスモポリタニズムは全くの観念論であることにも気づかされたという。そうであるならば「日本人」としての立場を引き受けざるを得ないと言われている。一九八二年、日本の歴史教科書にたいして中国・韓国からいわゆる「国際批判」が投げかけられた際にも、西川さんは先のような考えから、多くの歴史研究者や教科書執筆者たちが文部省の検定と戦ってきていたことはたしかだが、だからといって「悪いのは文部省です」と「日本人」としての責任を回避することはできないと書かれている。

西川さんはかねてからドイツとポーランドの歴史家の間で行なわれた両国の歴史教科書をめぐる交流に関心を寄せていた。ドイツとポーランドの歴史家による話し合いと同じようなことが日本と近隣諸国との間でできないか。こうしたことから、一九八四年八月、先の「比較史比較歴史教育研究会」によって「東アジア・歴史教育シンポジウム」が開かれたのである。西川さんはこれで日本と他のアジアの歴史家との間の対話ができると思われた。そのテーマは「自国史と世界史」であった。私がいまの時点で思うのは、ここにいう「自国史と世界史」とはおおよそ以下のようなことではないかと考えられる。「自国史」とは、歴史研究は何国人であれ個人に帰することは言うまでもなかるうが、国際的な会議の場では何国人であることを放棄はできないことを意味している。逆に、だからといって、自国のことにのみかかずらつては、他国の

人々の考えや苦しみ、自国に働きかけられている力や問いかけを理解することはできないということが「世界史」の意味である。帝国主義時代の様々の地域における支配と従属、あるいは帝国主義以前の古代・近世における地域の歴史、東アジアで言えば、近世の秀吉の朝鮮進出をも含めたのっぴきならない関係について、「自国史」から逃れられないという立場を前提に世界史の立場でお互いの意見を交流させようということではないかと。西川さんは、それからほぼ八年後、この「自国史と世界史」について次のように述べておられる。「外国史はなにか他人事に響くけれど、他国史となると自国史とのぬきさしならぬ関係を示唆するように思われる。だが、あえて『自国史と他国史』ではなく、『自国史と世界史』を問題にしたい。それは『自他』ともに人間であるように、自国史も他国史も含む世界史があり、そこが相互了解の場になりうると考えるからである」と、『自国史を越えた歴史教育』三省堂、一九九二年、二二一頁以下）。西川さんの考えは日米歴史学会議以来、基本的には変わっていないと言わなければならない。

いうなれば西川さんは世界史の社会構成史の再検討とは別の方向で、あるいは「東アジア世界論」というような地域世界の構造分析とは異なる手法で、「自国史と世界史」を考えられたのではなからうか。その際、西川さんが参考にされたのは「発展段階の図式的な適用にたいして鋭い批判」をされた江口朴郎氏の考え方であったと思われる。西川さんは江口さんの帝国主義論について次のように評される。「帝国主義時代には『近代的な』ものと古い『封建的な』ものが併存し、結びついている場合が多々存在する。この問題を説明するにあたって江口さんは、資本主義の反動化と国際的な『不均等発展』を基軸に据える。そして、なかならず農民とか民族を固定的に見るのではなく、具体的な階級対

立のなかで革命と反動のいずれの側がそれをとらえるかという風に見なければならぬ、と主張した」と（江口朴郎氏の帝国主義論について）『歴史と文化Ⅺ』東大教養学部人文科学科紀要（六六）、一九七五年、六八頁）。西川さんが一九八四年以降、都合四回の「東アジア歴史教育シンポジウム」で試みた東アジアの歴史家や歴史教育者との意見交換は、こうした江口さんの国際関係の見方を下敷きにしての交流だったのではなからうか。

2 西川さんの世界史教育

西川さんは二〇〇〇年に、おそらく多くの方がご存知のように「世界史という妖怪は未だに徘徊している」（『専修人文論集』六六号）という文章を発表された。この「妖怪」という言葉は、もとは一九四九年に行なわれた「世界史の基本問題」という座談会で尾鍋輝彦さんが「ひとつの怪物が、一九四九年の日本に突如として現れた。社会科学世界史という怪物」と発言されたことに由来するという。そして、この「世界史という怪物」を、西川さんはマルクスの『共産党宣言』の冒頭にある「ヨーロッパには共産主義という妖怪が徘徊している」をもじって「世界史という妖怪」と言ったのだと。西川さんはいかなる意味で「妖怪」というマルクスの言葉をもじられたのであろうか。マルクスの言を見るならば、「古いヨーロッパ諸国は、つまり法王とツァーリ、メッテルニヒとギゾ、フランスの急進派とドイツの警察は、束になってこの妖怪を捕えるための聖なる同盟を結んでいる」といっている。西川さんはマルクスの言葉をもじって、世界史教育を目的にしている国史推進者たちを揶揄しようとしたのであろうか。

西川さんは、ご自身が世界史そのものをどう捉えるかという問題につ

いては、あまり多くを語っていない。たしかに、江口さんの世界史の捉え方に共感を寄せてはもらった。その意味では柴田さんが期待された社会構成史の理論と「日・東・西」の三分の伝統的発想との再検討、さらには社会構成史の根底にある発展段階論などという課題に理論的に正面から取り組まれたとは言えないであろう。あるいは、東アジア世界の成立とか地中海世界の成立といった地域世界の構造や成立史に取り組むことから、地域世界によって構成される世界史を示しているというお考えもなかったように思われる。確かに一九八二年、ドイツとポーランドの教科書会議で報告されたフェルディナンド・ザイプトとイエジ・トポルスキの議論を紹介されている（詳しくは「一九八二年会議——『自国史と世界史』『自国史を越えた歴史教育』三省堂、一九九二年、二三〇—二四六頁所収）。しかし、西川さん自身も後に言われたように、自分は「世界史に関する理論的な関心というよりは、実際に高校の世界史の教科書を書いてみたり、あるいは世界史と称する講座や世界史辞典の編集に携わって」考えを深めるというスタイルであった。

それはともかく、西川さんが世界史関連の研究で関心を寄せておられたのは、日本では上原専祿氏や吉田悟郎氏の世界史研究、さらに岡崎勝世さんの「普遍史」研究等であったようである。日本ばかりか、先のマクニール氏やドイツやポーランドの世界史研究者の研究にも目を配っておられた。中でもパトリック・マニング氏（ピッツバーグ大）の *Navigating World History. Historians Create a Global Past*、New York 2003 の関心は強く、これが刊行されるとすぐに目を通されていた。西川さんは同氏とも親交を結ばれていた。マニング氏（一九四一—）は一九八三年の「日米歴史学会議」に出席したフィリップ・カーティン、ウィリアム・マクニールといった世界史的な視野をもった人々と親しい関係に

あるアフリカ史の専門家である。氏は、この著書で一九六〇年代から一九八〇年代にかけて、地域研究や世界システム論の研究が進展したことを丹念に叙述し、それが世界史研究の分野に大きな影響を及ぼしたことを述べている。

西川さんは四冊の世界史教科書の作成に積極的にかかわられた。日本において、かつての世界史の教科書は、西洋はヨーロッパを中心に、また東洋は中国を中心に叙述され、他の地域は残りのスペースに押し込められるという傾向が強かった。「教科書というのは、これまでの歴史教育の実践を無視して奇をてらってはならない、という性格をもっている。それにもかかわらず、やはり個性ある教科書を作ってみたいと思つた」と言われたが、西川さんは、世界史教科書では地域世界を縦軸とし、同時代史を横軸とし、地域世界も時代によって相互影響し合う関係として叙述されようとしたほか、ヨーロッパ中心ではなくイスラーム世界やアフリカも視野に入れられた。また、世界史Ⅱ外国史という固定観念を打破すべく、世界史の教科書に日本史を組み込んでおられた。また、「どの地域・時代にあつても人々は人間らしさ（人権）を求めて苦闘して来た。その努力を冷静に見るとともに受け継ぐべき遺産を確認することを基本方針に据えた」（『編集を終えて』『三省堂高校通信』一一二号、一九九二年一月一日）と言われている。

西川さんはこのほかに世界史辞典の編纂にもなみなみならぬ力を注がれた。そのお仕事で魅力的なことは何はともあれ『角川世界史辞典』に集約されているように思われる。これは一九九一年からおよそ一〇年の年月をかけて二〇〇一年刊行されたものである。この辞典で、西川さんは例えば「封建制」という言葉についても理論的な説明ばかりではなく、feudalism という英語がどういう過程で日本語に訳されたのかの説

明に気を配られている。中国の周代の制度がどこかこのヨーロッパの制度に似ているということ、それを *feudalism* の訳に当てた、そういうことを知ることが、この意味を考える上で重要ではないかと言われている（『本の旅人』二〇〇一年、七二号）。こうしたセマンティクス〔言葉の由来を示すこと〕は、「国民国家」などという概念の説明についても貫かれている。

さらに、西川さんはこの辞典でイスラーム圏の項目が多いことに触れて「それは、ここ二、三〇年間で、本当に半世紀前と比べたら想像できないほど、いろいろな地域が歴史研究の対象になって来たことの反映のひとつ」であると述べている。事実、この辞典では東アジア・モンゴルの項目が全体の二二・五%、西ヨーロッパが二三・八%、西アジア・北アフリカが一〇・八%、ロシア・東欧・北欧が九・四%、南・東南アジアが七・四%、南北アメリカが五・八%などとなっている。西川さん自身、そうした二〇世紀後半の歴史学の発展を背景として「現在の観点」から世界史をみたらどうなるか。是非、新しい字引を作ってみたい」「ここで世界史（および歴史研究）が大きく転換した、という認識からひとつ「新しい世界史像を」組み立ててみよう」ということだったと言う。つまり、それまで一九五一・五五年平凡社から出た全二五巻の『世界歴史事典』、一九六八年の『山川世界史小辞典』があるが、「半世紀のあいだ、これだけの規模の世界史辞典は出なかった、それを出そうという訳ですから」と言われているところに、西川さんがこの辞典編纂にかけた意気込みをうかがうことができよう。

（いじゅういん りつ・法政大学教授）